特集

知ろう・つながろう 渋谷の居場所⑥ ～まとめ～

今月号で最終回となる「知ろう・つながろう渋谷の居場所」―今回の特集の担当である武井と松本が、取材を重ねた中でそれぞれが感じた思いをお伝えします。

●全体を通して

テーマにもあるように、渋谷を拠点に居場所づくりの活動を行なっている他団体と知り合い、共同の企画や今後の活動につなげていきたいという思いからこの特集を行なってきました。子どもの分野から若者や働く世代、高齢者など、幅広いコミュニティに取材をして、その団体で大事にしていることや実際に取り組んでいる様子などを伺いました。

また、それぞれの団体では、障がいのある方たちがどのような関わりを持って過ごしているのかを取材し、ぱれっとに活かせることは何かを考えてきました。どの団体でも共通していることは、誰でも気軽に参加できて、その人のありのままを受け入れているということです。そして、試行錯誤を繰り返しながら地域に開かれたコミュニティが創られていると感じました。

●支え合う『居場所』

今回の取材を通じて、居場所に参加する人と企画・運営する人がお互いに支え合ってその団体が成り立っているのだと強く思いました。はじめに取材をした、※1『渋谷東しぜんの国こども園』では、地域を園庭とみなして、探索を行なっています。こども園に通う子どもたちは地域のことを知ることができて、地域の人たちも子どもの存在を知ることができ、そうすることで、安心して暮らせるまちづくりにつながるとおっしゃっていました。関わることを避けずに、門戸を広げてつながりを増やすことによって、より居心地の良い場所を作ることができるのではないでしょうか。

●いろいろな人が関わる『居場所』

１つの団体や組織に参加する人、関わる人の理由や求めるものは多岐に渡ります。性別や年齢などの属性の違いもさることながら、どうしてそこの団体に関わるようになったのかは人それぞれ違います。渋谷区の福祉職員が集う※2『次世代ネットワーク』では、自分たちの働いている環境を良くすることや気軽に話せる仲間を増やすことなどの目的があります。ただ参加するだけではなくて、主体的に関わることによってやりがいや活動の活性化につながっていました。

シェアハウス※3『MAZARIBA 中野』では、障がいがあるからといって、特別何かを準備するわけではなく、障がいがなくても、トラブルは日常的に起こるものだという認識をされていました。密接に関わろうとすると衝突することは多くなります。そのような時でも、誰かが中間に入り取り持つことができると心地よく過ごせると思いました。

●環境を整える

最後に取材をした※4『笹塚十号のいえ』

は商店街の真ん中に位置し、地元の方がよく通る場所にあります。そして、誰でも自由に立ち寄れるフリースペースがあり、お菓子や食べ物を持ち込んで過ごしてもいいようになっていました。たまり場ぱれっとが始まった当初も同じように、１つの部屋を借りて誰でも気軽に立ち寄れる場があり、そこからやりたいことを持ち寄り、幅広く展開してきました。

空間や環境を整えると、人々が集いそこから新たなきっかけが生まれたり、関わり合いが始まったりするということを改めて認識し、人とのつながりが希薄になりがちな今の時代にとても大事な要素だと感じました。

●今後の活動

今回渋谷の居場所をテーマに取材をしてきましたが、都心に拠点があることのメリットとデメリットがあると考えます。いろいろな人がたくさんいるからこそ、新しい可能性や面白い出来事が生まれるのだと思う一方で、孤独を感じやすかったり、無関心になってしまったりする場面も多くあります。程よい距離感の中で、人それぞれ持っている寛容になれるキャパシティーを少しずつ広げていくことが求められている気がします。

そして、たまり場ぱれっとでは、障がいのある人が地域社会や好きなところでより暮らしやすくなるように、仲間や友達が増え充実した生活を送ることを目的に活動を続けていきたいと思います。支え合いやつながりを大事にし、今後もたくさんの選択肢を提供していきます。

（たまり場ぱれっと　武井　琴美）

●地域に開かれた場所にしていく

去年から色々な団体を見学し取材させていただいた中で、共感し参考にしたいと思う点がありました。それは、表題にもある通り“地域に開かれた場所にしていく”ということです。

『笹塚十号のいえ』、『渋谷東しぜんの国こども園』ともに定期的に地域住民に開かれたイベントを開催していました。加えてそのイベントにはボランティアを巻き込んで、地域の人々の交流の場を提供していました。おかし屋ぱれっと（以下おかし屋）にも自主製品を販売するイートインカフェがありますが、ある時お菓子を購入していただいたお客様から「こんなお店があったなんて知らなかった。どんなお店かわからなくて今まで通り過ぎていたわ。」と言われたことがありました。『笹塚十号のいえ』、『渋谷東しぜんの国こども園』はそれぞれ人が入りやすいようにドアを開放してあったり、どんなことをしているところなのか一目でわかるようになっていたのです。おかし屋もイベントを通して近所の小学生と交流がありましたが、もっと気軽に立ち寄れる場所になれるよう、密な関わりをしていく必要性があると感じています。今年度の目標の一つとして「店舗でカフェ営業や展示会等を行ない、賑わいを作る」ことを挙げています。去年からカフェも本格的に稼働し、今年の２月には店舗をリノベーションして飾り棚やピクチャーレールを付けて「らぶらび」などの商品を展示できるようになりました。今後、メンバー達の描いた作品の展覧会等のイベントを開催し、私たちの思いに共感してくれる身近な仲間を増やしていきたいと思っています。

※[1] 2023年ぱれっとつうしん8-9月号取材　※[2] 2023年ぱれっとつうしん10-11月号取材
※[3] 2024年ぱれっとつうしん2-3月号取材　※[4] 2024年ぱれっとつうしん4-5月号取材

●コミュニケーションをよくとる大切さ

また、『次世代ネットワーク』、『MAZARIBA 中野』からは“コミュニケーションの重要性”を改めて知ることができました。悩みを抱えている人、困っている人の側に寄り添い話を聞くこと、思いを共有する事で信頼関係が構築されていくのではないかと思います。また、本来所属している場所とは違う場所で食事をともにしたりするなど、その人の人となりを知り、一方的ではなく双方向からのコミュニケーションを大事にしていきたいと感じました。

●私にとっての、そしてみんなにとっての“ぱれっと”という居場所

約1年にわたり居場所についての特集を執筆する中で、思い当たったことがありました。

私は子どもの頃に数年間父の仕事の都合でアメリカに住んでいたことがありました。現地校ではなく日本人学校に通っていたのですが、小学1年生から中学3年生までが在籍している小規模の学校でした。全校生徒を合わせても100人もいなかったため、休憩時間は年齢やグループに関係なく先生も加わってドロケイや鬼ごっこ、ドッチボールをして皆で楽しんでいました。人生で一番心身ともにのびのびと過ごした数年間であり、“私”という人格を形成したのは、間違いなくこの数年間であったと思っています。

中学2年生の時に日本に戻ってきて女子校に転入しましたが、女子校の風習なのか日本のグループ意識が強いのか、グループでまとまって行動をとる特徴があることを全く知らなかった故、色々なクラスメイトに話しかけていたところ怪訝な顔をされ「あの子はちょっと変わった子」というレッテルを貼られ変に目立ってしまったことがありました。今まで当たり前にとっていた行動が日本ではそうではなかったのかということに愕然とし、それが自分にとってとても居心地が悪く、同時に大きなショックを受けましたが、いつしかそんな雰囲気にも慣れ、日々を過ごしていきました。

中学生の時にそのようなことがありつつも、高校、大学とそれなりに楽しく過ごせてはいましたが、やはりどこであってもグループの壁を感じることが多くありました。それに対して本心では違和感をずっと感じていました。

大学4年生の時にたまり場ぱれっと（以下たまり場）に出会えたことで、その答えが明確になりました。私がぱれっとに親しみを感じたのは、日本人学校で過ごしていた時と同様に人と人の間に壁を感じなかったからです。たまり場のボランティアの会議に初めて参加した日からすぐに仲間として受け入れてくれたボランティア仲間達とともに、年齢、所属、障がい等関係なく皆で一緒に楽しい時間を過ごしました。誰かを孤独にしない、ひとりぼっちにしない―そんな雰囲気が日本人学校と似通っていたのです。ありのままの私を受け入れ、その人個人の特性に理解を示し、いろいろな垣根を越えて皆で楽しい時間を過ごすたまり場という居場所に出会わなければ、私は福祉の道に進むことはなかったと思います。

私のように、一つの居場所に出会うことによってその人の今後の人生に大きな影響を与えることがあるのだと思います。私はたまり場という居場所に出会っておかし屋の職員になりました。ぱれっとは私の人生を変えてくれた居場所です。私だけでなく、多くの人の人生に影響を与えてきたのがぱれっとなのだと思っています。これからも誰かの人生に影響を与え続ける団体であり続けることを一職員として願っています。

（おかし屋ぱれっと　松本　亜沙子）